

---

# 従者の日常

てるよふ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

従者の日常

### 【Nコード】

N8958V

### 【作者名】

てるよふ

### 【あらすじ】

ここではないどこかの世界に暮らす、奇妙な主従の日常生活。どこかネジがすつ飛んでる二人と、やっぱり変な友人知人達の、何のことはないありふれた日々を、従者一人称でゆるく書いていきます。

拙作「Wizard & Blade」の外伝・後日譚にあたりますが、ネタバレ成分は微量です。本編知識も不要です。

9 / 5  
あらすじ改訂

## その1

この人にならついていける、という人を持つ。それは幸せなことだ、と思う。

その人の為ならば、身命をなげうつても惜しくはない、左様な人物がいかにこの時勢に稀有な存在かは、読者諸氏にも解っていないだけよう。

私は幸いなことに、そんな人物に恵まれることができた。

大げさな事と人は笑うかもしれないが、私はその御方の為ならば何をしてもしも良いと思っているし、その御方が死ねと私に命ずるならば喜びのうちに果てるだろう。その御方が天空の風琴のような御声で私の名を呼び、白磁のような繊手で私に触れてくださるとき、私は喻えようも無い幸福を得ることができるとだ。

さて、これから始まる一連の文章は、そんな主に私が御仕えしている日々のうちに起こった出来事を、散文の形式で綴ったものだ。

読者諸氏においては、私が主に最高の敬意と至高の歡喜をもって御仕えしていること、よくよくご承知いただきたく思う。

……たとえ、私がどの様な言を主に対してものし、どの様な行動をとろうとも。

約束だぞ？

\*

先日のことである。

その日は雲ひとつ無い青空が広がり、私が手ずから剪定した庭木

たちは燦々と降り注ぐ陽光の中、伸びやかにその枝葉を茂らせていた。添水そひすの音が耳に心地よく響く中、私は午前中の作業を終えた疲労感と達成感に包まれながら、縁側に腰掛けて、緑茶の注がれた湯呑みを傾けていた。

こんなことを考えもした。抜けるような青空というのは、こんな青空のことを言うのだろうな、と。

そんな心地よい静寂を破ったのは、敬愛する主様の、焦ったような声だった。

「うわ、ちよつと……!!」

屋敷の奥、書斎の方から聞こえてくる大きな声。しかし私は動かない。いちいち反応しては仕事が増えるだけだ。何かが続けて落ちる音と、ぎゃあー、と悲鳴じみた声が続いて聞こえた気もしたが。

「ああ、もう……!!」

無かったことにして、休憩を再開しようと思った矢先。

「ちよつと来てー!!」

呼ばれたので、やれやれと吐息して動くことにした。湯呑みを置いて立ち上がるのに、思わず「よつこらせ」と声が出てしまい、多少の落胆を得る。まったく、私も年をとったものだ。

果たして、主はこの屋敷の中では数少ない洋室の中央で、腰に両手を当てて立っていた。若干煤けた風な表情には、焦りと苛立ちがありありと見て取れる。

雑然とした部屋の中を見回せば、大きなマホガニーの机の上にとさりと積まれていた紙や本が消え失せており、代わりにそれらが渾然となったうず高い小山があった。どうやら、机の上のバベルが、とうとう絶妙なる均衡を失って崩壊したらしい。

「見てよコレ」

「はあ」

私が主の美しいかんばせに視線を移していると、その山を指差し、主は言った。私は生返事を返しながら、言われた通りに再び山に視線を戻す。

「……これはひどい」

「感想を述べる、とは言っていない」

「はあ」

主様 御神楽紫苑みかぐらしおんという は素晴らしい方だが、このような事がよくある。何かを私にして欲しいのだが、何ゆえかをおっしゃらない。或いはその逆で、ご自身の心境や、現状をおっしゃられるのだが、それで私が何をすればよいか欠けている。

察しろだとか、空気を読めだとか、賢明なる読者諸氏はそう思われたかもしれない。確かに一般には、一を聞いて十を知る、というようなことが良いこと、それが出来るのが良い部下とされる。

私も重々承知している。が、それだけでは済まないのが人の世というものだ。

「片付けるの、手伝って欲しいんだけど」

肩を怒らせながら、紫苑様。 声音のほうは、幾分か疲れの色が混じっている。

「……恐れながら、過日私がこの部屋を掃除した際、叱責を頂戴しましたが」

「私が何をどこに置けばいいか言うわ」

「では、御自分でなさった方が早いのでは」

だいたいこの主は「あれ」だの「そこ」だの、指示語が多いのだ。指示する場所や物についての見解が相互に一致していればそれで良いが、認識がちぐはぐだと互いに困る。私がこう言うのも、互いの不幸を最小限に留めるためなのだ。 誓って。

この部屋は設計当時、一応「書斎」として設けられたものなのだが、既にその機能 蔵書を保管し、落ち着いて読書に耽るための空間 を失って久しい。私からすれば最早ただの物置に思えるような有様で（しかもほぼ全て紫苑様の私物）、なるべくならば手

を出したくはなかった。それでも我慢ならずに掃除を敢行し、結果怒られるというわけだ。たいてい翌日には、もう部屋の中は散らかり始めている。こういつのをエントロピー増大と言うのだろうか。

そういつたことがある度に「もうこの部屋の掃除などすまい」と思い、ところがやがて我慢できなくなり手を出してしまうのだ。私の心情、読者諸氏の中にも理解していただける方がいらっしやると思うのだが、いかがだろう。

「大体ですね。紫苑様なら手など使わずとも、どうとでもなさることができるとでしょう」

なにせ紫苑様がその卓越した魔術師としての力を用いれば、六十四ほどの物体を同時に宙に浮かべて自在に操ることができるのだ。

私と合わせて4本の手を使うよりも、余程早く片付くに違いない。

「かわりに頭を漙く使うし漙い疲れるんだけど、アレ」

か細い指先が銀系のような髪をかき分けて頭を搔く。埒が開かないと思った私は、はあ、と嘆息して、建設的な行動に移ることにした。

「手足と頭と、疲れるならどちらも変わらないではありませんか。

さあ、私も手伝いますから、片付けましょう」

……ああ、言ってしまった。まあ、主に片付けるのは紫苑様と  
いうことで、私は指示されたとおりにやればいいか。

内心で頭を抱えながら、とりあえずはその指示の指示語含有量が低くなるよう、私は十ほどの神仏に祈ってみるのだった。

あまり効果はなかった。

## その2

我が敬愛すべき主である御神楽紫苑という方は、鼻肩目を差し引いても掛け値なしの美女だと言える、と思う。 出会って何年経ったかもう数えるのも飽いたが、これまで並ぶほどの美貌の持ち主に会ったことは数えるほどしかない。 こんなことを私が言うとは鼻肩の引き倒しとか言われるやもしれんが、私の中での不変にして不朽、永遠の真実なのだ。

銀を紡いだかのように煌き、絹のように滑らかな御髪。 紅玉を嵌め込んだかのような、意思と活力に溢れる瞳。 名工の手による彫像のごとき、美しく整った面持ち。 水晶の風琴がごとき、涼やかな御声。 長身でありながら、女性らしさをしつかりと主張する肢体。 三体数も、大きさとバランスとの調和を体現したかの如きだ。 いや、ちょっと胸が大きすぎるか。

先天性の白子ゆえに強い日差しを厭われるし、昔は身体が弱かったためよく病気を患っておられたようだが……。

まさに完璧。 完璧すぎる程だ。 外見は。

内面はといえば、残念である。 総合すれば世間からの評価は、一言で表現して「残念な美人」というところだろうか。

ものぐさ、ぐうたら、人の話を聞かない、やたら理屈っぽい、頑固。 良く言えば意思は強いし、頭はとても良く回るということになるが、その頭脳はだいたい私に比べると都合が悪いことの隠蔽に使われるから困る。

私が管理している家計から少しずつちよるまかして高いお酒を買ったりとか、お止めくださいと言っているのに隠れて煙草を吸ったりとか。 ……まるで子供のやることのようにだ。

知性と稚気を併せ持つと言えば聞こえはいいが、側仕えの身とし

てはそんな美辞で片付けられてはたまらない。紫苑様が何か騒動を起こしたとして、後始末をするのは私なのだ。当人はその頃には軽やかにどこかに行っているか、にやにやと私を見ている。

何度かマジギレしたこともあるが、まあ、それだけである。私が説教して、紫苑様が謝って、それで終了、後には引かない。あとは説教した内容を覚えていってくだされば良いのだが。

……母親か、私は。掃除も料理も洗濯も私がしているし。私の方が年下なのだが。

というようなことを知人に愚痴ると、半数程度は「辞めちゃえば？」というような事を言われる。私も何度かそう思ったことはあるが、不思議と実行に移そうとは思わないものだ。もう半数は、「それはもう、愛だろう」というような返しをしてくる。「ごちそうさま」とすら言われたこともある。まあ、自分で言うのも何だが、こればかりは、そう、惚れた弱みだ。

ときに、諸氏は、私の性別を男女どちらだと思っておられるのだろう。正解は後に発表するとしよう。

……こういった部分で、紫苑様の影響を受けているのだろうか、と思う。昔の私なら、このように冗談めかす余裕も、多分無い。

と書いたところで、びりびりとした振動と共に大きな物音が聞こえてきた。何かが発火したような、そんな音だ。筆を走らせる手を止め、油断無く感覚を周囲にめぐらせる。何が起きた？この時勢に、この場所に、よもや狼藉ということはあるまいが……と思考しながら、棚の上に置いてある愛刀の柄を手を取った。武門に生まれた身、今でも鍛錬は欠かしていないが、実戦からは離れて久しい。有象無象相手に遅れを取る気はせぬが、用心するに越したことは無いな、と立ち上がるうとしたところで。

「ただいまー」

聞こえてきた声に、一気に脱力した。爆音といえばそうだ、この御方がいた。

刀を元あつた位置に戻し、主を出迎えるために玄関へと向かう。

今日は確か、皇国魔導院の会合に顔を出していらつしやつたはずだが……。

上で紫苑様のことをさながら手のかかる子供のように（というか実際ととても手がかかる）書いたが、実はあれで、とてもとてもお偉い立場にある。私と紫苑様が生まれ、そして今も住まう国は応神と号するのだが、この国の魔術師の総元締めである魔導院という組織の、終身名誉顧問という、なんともな地位にあられる。

この「皇国魔導院終身名誉顧問」以外にも、幾つものやたらと仰々しい肩書き。たとえば「皇国魔導軍名誉元帥」だの「宰相府顧問」だの「科学省相談役」だの。をお持ちだが、本人は何処吹く風、実に気分に生活していらつしやる。少しは自身の立場を慮つていただきたいものだ。

極めつけは、なんと皇族であらせられる。月読宮家という、皇統にもつとも近しい家柄の当主。はもう引退されたが、重鎮には変わりなく、その公的な発言の影響力は非常に大きい。ならば殿下と呼ぶべきだろうという向きも当然あつたし、いつだったか不敬罪に問われそうになつた事もあつた。しかし私がそう呼ぶと烈火の如き怒りを頂戴することになるので、とてもそうは呼べないのだ。

その時に私の罪を鳴らそうとした一条何某という貴族も、紫苑様が指先に真つ赤な炎を灯してひと睨みしたら、黙ってしまった。何せ、たまに本物の烈火が飛ぶから洒落にならん。

閑話休題。「おかえりなさいませ」と出迎えた私を尻目に、紫苑様は自身が破壊した屋敷の門を、私では到底扱えない程に高度な術を、また器用に操つていそいそと修理していらつしやつた。

地面には先程の爆音を引き起こしたと思しき現象の跡が残っている。石畳と玉砂利と土が吹き飛ばされ、円形にえぐれた地面。つまりはクレーターだ。

「逆噴射で制動をかけられたのですね？」

渋面を作って、私は問うた。思えば先程文机に向かっている際に、きいい……んといったふうな、妙な音がしていたのだ。どこか近くで路面工事でもしているのか（舗装された路面を切るカッターのような工具から、そんな音がする）と思っていたが、なるほどこの方が発された音だったようだ。

「だって、ほら、たまに飛びたくなるじゃない。風を感じて」

「はあ、まあ、解らなくもありませんが……賀茂様も弓削様も安倍様も『やめてください』とおっしゃってたでしょう。何よりこの国の法で、都市部での音速超過は禁じられているのですが」

この法、現在本気で適用されるのはこの御方ほかごく少数しかおるまい。かなり昔からある法律なのだが、そうと知らなければ、この方の為に作られたと言われても納得できてしまう。あ、私も入るか？

「シールドもちゃんとしたから被害ほぼゼロよ！？ 最後は減速タイムラグ間違えて強引に制動かけたから、これ壊れたけど！」

白い頬を紅潮させて強弁する紫苑様。お綺麗だが、言うべきこととは言わねばならぬ。

「はいはい子供ですか貴女は。もういい御歳なんですから、そういう言い訳は見苦しいだけと何度申し上げれば解っていただけのです？ もう少ししたら警察が来ると思いますので、罰金は来月の小遣いから引かせていただきますからね」

「え、何、あれから更に減らすっての？ 酷くない？」

「酷いも何も、行為とその結果、まさに因果応報というものです。

大体……」

くどくど、くどくどと門前で説教をする私。それを見て笑っ

てゆく街の人々。

まっこと得難き日常だが、どうにも心労が絶えんのはどうにかならんものだろうか……。

### その3

さて、そろそろ私のことも述べねばなるまい。前回、私の性別に関する問いかけもしたことだし。

まずは概要から。氏は源、姓は<sup>さえつき</sup>冴月、名は<sup>かくや</sup>輝夜。官位は従四位下近衛中将、まあ紫苑様の側仕えを務めるための名目上のものだ。これ以外にも色々と肩書きがあるが、紫苑様と同じくあまり気にはしていない……とはいえ、年齢相応、官位相応の振る舞いは心がけているつもりである。

正直、分不相応な地位を頂いている、と思う。確かに私は一応冴月という武家の娘であり、公的な勤めもいくらか果たしてきたが……。皇族の身辺の世話をする私が無位無官ではまずい、などといった政治的な事情というものがあつたのだろう。ただ紫苑様のお側に侍ることを望み、また剣の道をひたすらに志して来たが故に、どうにもそういった事には疎い。

そう、娘、つまりは女だ。読者諸氏におかれては意外だっただろうが、それとも予想通りだっただろうか。

自己紹介はこのあたりにしておこう。今日はこの屋敷、六条院に来客があつた。

私は貴族かつ今風な言い方をすれば公務員、そして紫苑様は皇族で、ともすれば税金泥棒との謗りを受けかねない身の上だ。故にこの国の人々へと、我々の扶持を与えてくれることへの敬意と感謝をもって、何かを還元せねばならぬ。果たして紫苑様の頭の中にこのような念があるかは知らないが、たまに魔術理論書や実践書を執筆されたり、雑誌への寄稿をされたりしていらつしやる。

ちなみに私は、週に二度ほど、市井の道場に招かれて剣術の臨時講師を務めたり、やはり雑誌に記事を書かせていただいたりしている。

現実には実戦を経験した剣士などそう居ないためか、どうやら人気の記事らしい。まことにありがたい事だと思っている。話が逸れた。

来客とは、紫苑様が寄稿されている雑誌を出している、わが国でも老舗の出版社の編集者であった。紫苑様の担当は……実名はなにかとまずいので、N氏とさせていたごう。彼は背こそ低いが、少なめに見積もっても三尺はある横幅がそれを補って余りある、夏ともなると大層暑苦しそうな風体の紳士である。常に脂ぎった顔に満面の笑みを浮かべており、またその脂が余程良い潤滑油と見えて舌も大層良く回る。ともかく、率直に申せば、二つの理由であり歓迎したくない客だった。ひとつは、私にしてみると彼のような口ばかり回る（もつとも、彼の仕事ぶりを私は知らない）、これは偏見と言うものだが、人種は好かないということ。もうひとつは彼の来訪のたび、応接間の椅子がギシギシと音を立てるので、壊れやせんかと冷や冷やさせられるためだ。

今日はそのN氏が、新人と思しき青年S君を連れてきていた。このS君はN氏とは対照的に、さながら鉛筆の如き瘦身。とはいえ拳措には新人らしい真面目さと礼儀正しさが感じられ、私は好感を抱きながら彼らを屋敷内に招き入れたのだった。

「こちら、今度から殿下の担当をいたします、Sでございます。ほれ、挨拶せい」

「え、Sと申します。殿下におかれましては、ご、ご機嫌うるわしゅう」

「かったいわねえ。Nさんも、最初こんなだったっけ？ いいのよS君、そんなに畏まらなくなたって」

「え？ は、はあ、殿下……？」

「はっは、懐かしい話ですなあ」

「堅苦しいのは嫌いなよ。昔は良く頭の固いのにな怒られたもんだわ」

来客二人に出すお茶を淹れている後ろから、こんなやりとりが聞こえてくる。　　やたら気さくで親しみやすい皇族、しかも超美人というので市井の人々からも人気は高い紫苑様だが、フランク過ぎてもどうなんだ、と常々思う。　　言って聞き届けていただけのものなら、もうとつくに直っているだろうから、口には出さんが。

「N先輩N先輩、殿下ってお幾つなんですか……？」

おい聞こえてるぞS。　　小声のつもりだろうが、練達の剣士の感覚を侮らないでいただく。

……まあ、疑問に思つのも無理もないことなんだが。　　ちなみにN氏は答えなかった。　　というか、このあたりの疑問を持つところからして、S君はこの都の出身ではないらしい。　　ならば紫苑様の人となりをあまり知らないというのも、頷ける話だ。

「お手伝いさんも凄い美人さんですし……」

「だろう？　　だからお前、運がいいって言っただよ」

……言われて悪い気はしないな。

「粗茶ですが」

形式通りの言葉と共に、私は湯気をたてる湯呑みをふたつテーブルの上に置いた。　　紫苑様のところには、既に手ずからお淹れになった珈琲が注がれたマグカップが置かれ、特有の香気を放っている。　　紫苑様の傍らに、盆を持ったまま私が控えたところで、本題が始まった。

さて、紫苑様は昨日徹夜をされていたが、なんとか原稿は無事に完成したらしい。　　茶封筒に入った紙束が紫苑様からN氏に手渡され、N氏が「失礼いたします」と前置いてから、中身の検分をはじめた。

S君はといえば、ちらちらと紫苑様と私を見比べている。　　これで仕事になるのやら……などと呆れていた折、マグに口をつけていた紫苑様がそれを置き、S君と視線を合わせて、ふわりと微笑まれたのだ。　　恐ろしく邪気の無い笑みだったが私にはわかる。　　直前

の目は面白そうなおもちゃを見つけた子供のそれだった。

……S君、哀れにもきみは今蛇に睨まれた蛙の立ち位置になったのだよ。あー、その僅かな赤面と照れの入った表情、それは思う壺だ。

それにしても紫苑様から、あれほど澄明な微笑みを向けていただけるとは、羨ましい。嫉妬すら覚える。表情にも仕草にも出さないが、いま私の胸中はととてもとても複雑なのだ。

「輝夜、おかわり。お二方にも」  
「はっ」

御声をかけられた。私が内心で若干の嫉妬心を育てているさなかに、マグカップが空になっていたらしい。不覚……！

盆の上に湯飲み二個と、マグカップを載せて応接間を出る。視界に入り込んできた蚊を指先を動かして放った衝撃破で叩き潰しながら、蚊取り線香をそろそろ用意せねば、と思った。

珈琲は、紫苑様が淹れられたものがサーバーの中に入っている。保温性も密閉性も高い特別製らしいが、見た目は普通のガラス製サーバーだ。なにやら複雑そうな術式に包まれているあたりが特別製。茶のほうは淹れ直した。

戻ってみれば、別段暑くもないのに紫苑様のシャツの胸元が自然に開いていたり、S君の目線が……おいこらその目線、どこに行っている。気持ちはわかる、わかるが、私が居る前でそのような不埒な……！

「紫苑様、御戯れはほどになさってください」

あくまで冷静に声を出す。やれやれという風に吐息をしながら、湯飲みとマグをテーブルの上に置き、ついでに紫苑様の胸元のボタンを閉めにかかる。平常心、

平常心を保て冴月輝夜。

「まったく、はしたない」

後ろでS君が「これはこれで」とかつぶやいている気がする。  
一体なにが「これはこれで」なのか……。

……ということがあったが、原稿の受け渡し自体は滞りなく行われた。紫苑様が文章を書かれると毎度毎度と誤字脱字が多いので、今回もきつと校正の手間を出版社の方々にはかけさせてしまっただろう。

個人的にはS君の行く末が気になるところだ。二人が屋敷を辞去する直前までぽーっとしていたのでおかしいと思ったのだが、軽いチャームを使っていたらしい。

何考えてるんですかと一発怒鳴ったら「最近輝夜が冷たくて寂しかったんだもの」とかおっしやられた。まったくけしから……ん？

これはつまり、私の反応は紫苑様の思う壺だったということか……？

## その4

その日、紫苑様は弓削景亮ゆげのかげあきらどの、安倍真理あへのまりどの、賀茂康則かものやすのりどのといった人々と行きつけの飲み屋に出かけられて、私は屋敷の中でひとり。風呂を済ませ、髪を念入りに拭いたあとに乾かしながら、数週間後にこの六条院で催される歌会の招待状をしたためていた。ちなみに上記の面々の肩書きを列挙すれば、先から魔導院右院次席、同筆頭書記官、陸軍少将・魔導軍帝都駐留師団参謀長、といったところになる。紫苑様に言わせれば「私の可愛い弟子」たちだ。皆もうれつきとした大人の割に、どうにも子供じみた茶目っ気が抜けない面々だが、絶対に紫苑様の影響だと思う。

飲み屋と言ったが、高級料亭とかその類の場所ではない。篝火かがりび横丁という、京の中でもとくに猥雑でごちゃごちゃとした限界があるのだが、そこにある「夢庵」という古い居酒屋である。切り盛りするのは妖狐と猫又の夫婦で、創作和食というのか、応神の伝統食と西洋料理を組み合わせたような料理が売りだ。

実は私もよく行っているが、安くて美味しい、いい店だ。行き着けとあつて紫苑様にも慣れているし。

余談だが、この都は昔から妖怪変化の跋扈していた歴史があり、「夢庵」の夫婦のような非人間種族も決して珍しいものではない。とくに妖狐や猫又は、人化すれば狼人族や猫人族のような亜人種と大差ない外見になるため、日常に違和感無く溶け込めるのだ。

ちなみに私は狼人という亜人種で、狼の耳と尻尾を種族特徴として持ち合わせている。それらしい記述が無かったって？ 尻尾振っていると耳が動くとか、自分ではとても書けん、恥ずかしいし。「今日はこんなものかな……」

筆を置いて、軽く伸びをする。文机に向かって長時間作業するのは、なんとも疲れるものだ。

寝る前に少し身体を動かして、それからもう一風呂浴びて……などと考えて、立ち上がる。

そんなところで、電話が鳴った。

はてさて、一体誰だろう。時刻はそろそろ子の刻に差しかかるうかという頃、こんな時間に電話とは……。

暗い廊下にベルの音がうるさく響く。まったく非常識な。

かといって不機嫌さも露骨に対応するわけにはいかないの、いつも通りに黒い受話器を手にとり、音を作って対応に出ることにする。

「もしもし？」

「あ、輝夜様あ！ よかった、まだ起きてらしたんですね！」

「……葛子殿か？ どうした、何かあったのか？」

嫌な予感しかなかった。出たのは「夢庵」を切り盛りする夫婦の片割れ、妖狐の葛子殿。私の声を聞いて安心した風だが、何やらただ事でない事態が進行中だったりはいしないだろうか。

「紫苑殿下が、そのう」

「よし、わかった、すぐ行く、待ってる」

受話器をがちやりと置いた。切るまでに「あつ、まだ何も言っていない」とか聞こえたが、まあ関係ない。とりあえず現場に赴いて、紫苑様をひっ叩いて説教すれば多分大丈夫だ。

部屋に戻り、鏡台に置いた髪留めを手にして、腰まで伸びた黒髪を後頭部に纏め上げる。いわゆるポニー・テール、これが私のいつもの髪型だ。

いつとき集中し、全身のパスを開く。深呼吸をする感覚で、魔力を私の身に刻まれた術式へと行き渡らせた。さながら一枚の羽のごとく、身体が軽くなる。自身の周囲に力場を設定し、余波を周囲へと漏らさぬように注意を払う。そして全身の代謝を増強し、これからすることに耐えられる状態を整える。ここまででコンマ5秒。

縁側から突つ掛けを履いて庭に降り、夜風に身を晒しながら門へと向かう。そこを出れば、篝火横丁へと続く六条大路だ。深夜になりかけの時間帯、魔術光による街路灯と月明かりが、人影の無い通りを青白く夜の中に浮かび上がらせている。

そして、私は地を蹴った。刹那の間に遷音速域に加速、白い霧に包まれた私は、水蒸気の尾を曳きながら横丁へと猛進。二千メートルの距離を、十秒程度で走り、いや、飛び抜けた。

さて、たどり着いた場所を見回してみると、あっけに取られた顔をした人物がひとり。

記憶に拠れば、小柄な彼女は、魔導軍帝都駐留師団・参謀部の副官、鏡原奈々（かがみはら なな）嬢だ。竜人族という、小さな角と色鮮やかな髪・虹彩が特徴の亜人族であり、彼女のそれは空色である。私が剣術を手ほどきしたうちの一人で、今も時々食事を共にする程度の仲だ。

とりあえずは、こんな時間にこんな場所に居るような人物ではない。ある例外を除いて。

彼女は私を見、私も彼女を見据えた。視線が合わさったその瞬間、私たちは比類ない理解と共感を得、ふたつの異なる魂は一つに結び付かんばかりだった。

「？」  
「！」

数分後、私たちはくだんの店の前にいた。

つまりは奈々も私も、上司ないしは主を迎えに来た、ということだ。参謀長もとい賀茂殿も紫苑様も大変な酒豪であり……その、なんだ。これ以上は主の名誉のために、ってこの後の展開を書き記すと全部バレるんだよな。まあいいか。

ともかく、上役に苦勞させられる者同士、無言のまま魂の交歓を果たしつつ「夢庵」の前にたどり着いた。

中からはいい感じに酔っ払った天空の風琴をかき鳴らすのごとき  
声が響いてくる。　　どんだ。　　私は思わず頭を抱え込んでその場  
にしゃがみこんでしまいたくなつたが、電話で助けを求められてこ  
の場に来た以上、店の前で悲嘆に暮れてるわけにもいくまい。

ふたたび奈々と顔を見合わせる。　　そして互いに頷く。　　無言の  
うちに行われる意思疎通、人間とはこうしてわかりあえる生き物だ  
つたのか。

二人がかりで引き戸に手をかけ、一息に開け放つ。

「そこまです！」

奈々が叫んだ。　　そういえば中で何が行われているのか、電話を  
すぐ切つてしまった私はわからない。　　が、その惨状を一目見て、  
だいたい理解できた。

一言で表すならば死屍累々。　　飲み屋でそれということとは、つま  
りはそういうことだ。　　つんとした酒精の匂いが充満する中、さ  
ほど広くない店内で、十数人ほどが酔いつぶれてぶっ倒れている。  
中にはヨダレを垂らしていたり、既に吐いていたり、そんな老若  
男女の、（死んでないが）屍の環の中央で

「うつぶ、もう、駄目……だあ」

こちらに背を向けた帝都駐留師団の参謀長が、一升瓶をさながら  
杖のようにして、ずるずるとテーブルに沈んでいった。

「あによう、アンタももうダメなお？　　ったく根性ないわねえー。  
もう、私しか居ないじゃないっ、ったく」

銀糸のような御髪を振り乱し、白皙の肌は酒精に侵されて朱鷺色  
に染まり、きりりとした相貌は墮落の二文字がびたりと当てはまら  
んばかりに崩れた麗人　　つまりは紫苑様が、んぐんぐプハーっ、  
と一升瓶を開けて、胡乱げな言葉を発していた。　　着物の合わせが  
崩れて大変に扇情的な御姿でいらっしやる。　　酒臭さで評価がマイ  
ナスに振れてしまうが。

カウンターの内側を見てみれば、長身の妖狐と小柄な猫又が、も  
うお手上げ、助けてといった風にこちらを見ている。

奈々は想像を超える惨状に、最初の一言を発したまま口をあぐりど開けて固まってしまっていた。そういうところがあるから小動物的だと、今しがた沈んだばかりの上司にからかわれるんだ。小さいし。

さて、どうしたものでらう？

「あ、輝夜に奈々ちゃん。どうよ、ちよつと飲まな〜い？」

酔っ払いが何か言い出した。

「ね、葛子さん、もう二本……」

私は無言で手刀を突き出した。放たれた衝撃破を顔面にしたたかに受け、意味不明な悲鳴を上げて酔っ払いが引っくり返る。後頭部をうしろのテールに強打した気がするが、まあ、あの位では死なないから大丈夫だ。たとえ死んでも蘇るし。

「悪は去った」

呟いてみる。隣で奈々が青い顔をしているが、修行が足りんな。何のとは言わんが。

「それにしても、何故こうなった。普段はこんな飲み方はされないんだが」

「あ、私は電話で聞いたんですが」

後になってからそろそろと集まってきた関係者が、潰れた知人友人親類を引き取っていく中、奈々が私の疑問に答えてくれた。

そういえば私は電話すぐ切ってしまったから、何があったのか具体的にさっぱり聞いていなかったのだ。

そりゃあ、こんな深夜に呼び出そうというのだから、状況説明はするよなあ。

「うちの上司が、どうも殿下に飲み比べを持ちかけたらしく……そこで殿下がおっしゃったそうです」

「最後まで残ったのに、うちの輝夜1日レンタルするわ！」

……はあ？

何を言っているかはわかる。 言っている意味がさっぱりわからん。

「尻尾モフリてえとか耳ピクピクさせてところが可愛いとかで輝夜さん人気あるんですよ」

「…… 狼人族なんてそこら中に居るだろう」

「いえ、お堅い輝夜さんだから良いんだとか。 輝夜さん自覚ないですけど、紫苑殿下といっしょにいらっしゃる時なんて、表情はとても凛々しいのに尻尾ぶんぶん振ってらっしゃいますし」

…… 無意識の挙動まで平時も御するのは神経を使うから、気にしないことにしてるが…… こういうことがあるから、狼人のこの身が時々恨めしくなる。

「うちの隊に指南にいらっしゃる時も、撮影部隊が待機してますし今度から物陰をしつかり検分しておく必要があります。 この国の人間はやはり油断ならん。

とりあえず紫苑様は明日から禁酒禁煙、あと…… どうしようか。

説教二時間は…… その間私の仕事が止まるからダメだ。 ……

いや、そうだな。

「怒りませんね？」

「いいや、怒っているとも。 そうだな、どうして差し上げようか

……」

いっそ、本当に何日かどこかに出かけるのもいいかもしれん。

私としては骨休めになるし、紫苑様には私という存在の有難さを実感していただく良い機会だ。

うんそうだ、そうしよう。

「…… 何笑ってらっしゃるんですか？」

「いや、うん。 ひとつ良いことを思いついてな」

いや待て、現実逃避する前に「夢庵」のお二人に謝らんといかん

だろ、私。

## その5

先日のことを受けて、私は事前の予告無しに有馬の温泉郷へと小旅行に出かけた。さすがに置手紙はしてきたが。

一人旅など、何年ぶりのことだろうか。まして、自ら望んで一人どこかに物見遊山に行くなどというのは、ひよっとして今までなかったのではあるまいか。

……で、存分に羽を伸ばして、帰って来てみたならば。

「よう、おかえり」

その声を聞いて、私はどさりと荷物を取り落としてしまった。声にならない言葉を紡ごうと、口がぱくぱくと動く。

燃えるような赤毛に精悍な顔つきの長身の男。竜人族の証の小さな角は額に。忘れもしない、この姿……。

……アレス・イエル。誰が呼んだか”戦神”との異名をとる、その筋では伝説級の傭兵だ。現役時代の私も相当暴れたものだが、こいつはこいつで非常識な逸話には事欠かない。瞬発力、最高速度、剣速 あらゆる意味で自身のスピードを武器にしている私に對して、こいつはあらゆるバランスが取れている。それも高いレベルで、だ。

まあ、問題は戦闘能力ではない。そんなところにはない。

甚平を着て縁側に腰掛けているヤツの隣には……

「あらお帰り。あなたが居なくて大変だったけど、丁度良くアレスが帰ってきてくれて助かったわー」

「ったく、酷い従者がいたもんだ。何があつたか知らんが主置いて一人旅だもんなあ」

「ごろごろと、まるで猫のように甘える紫苑様の姿がある。」

「ま、おかげで俺は昨日、邪魔も何もなしに楽しめたんだがな。」

「ありがとよ輝夜」

「うるさいだまれ」

そんなところで艶っぽく微笑んでないください紫苑様。私がない昨日、何があったかありありと想像できてしまったまりま……ごほん、私は血涙を流さんばかりです。

この男、何が問題かというのだ。紫苑様が、完璧に惚れてるのだ。紫苑様から、惚れたのだ。

皇族がそんな傭兵なんかと惚れた晴れたの関係になって良いのかといえば、当然良くはない。が、紫苑様は一時さる理由で国外追放というか……ともかく応神の皇族としての身分をいつとき失い、一介の魔術師として活動していた時期がある。

その頃はもう、私も紫苑様もこの国に戻ってくるつもりなど無かった（戻れるような状況でもなかった）から、まあなんとというか……。若気の至り、というやつか。その至りが今に至るまで続いていて、途切れる様子も無いから困ったものなのだ。

恐らく、あちらこちらに痕跡が残っているだろう。むろん掃除するのは私。しばらく二人の空間となる紫苑様の寝室も、掃除するのは私。

泣ける。

「つてか、お前、ジーンズにTシャツかよ……。イメージじゃないにも程があるぞ」

「ほつとけ」

昼食は店屋物を取ることにした。私も帰ってきたばかりだし、よもや3人になるとは予想していなかったから、素材も足りん。

「蕎麦かうどんを取ろうと思うのですが、どうなさいます？ ああ紅いの、お主は素うどんではないな？」

「待てコラ、勝手に決めんな」

受話器を手に居間へ声をかければ、苛ついた声で返事が返ってくる。

「私はぞる。 お酒欲しいわあ」

「俺は天そば頼むわ」

「承知しました。 紅いの、かけそばだな？」

「おい、耳か脳がおかしくなったんじゃねえか、お前。 天そばつつたるうが天そば」

「ちっ、仕方の無い奴め」

舌打ちしながらダイヤルを回し、近くの蕎麦屋にかけて、注文を伝えた。 私は天抜きだ。

ここでちゃんと紅いのの天ぷらソバも注文してやるあたり、私は優しいと思う。 ちなみに紅いのというのは、私がアレスを呼ぶ際の呼び名である。 髪も鎧も真紅色、ゆえに紅いのというわけだ。

殿付けなど勿体無い。

「輝夜ー、アレ開けていい？ 八海山の」

「どうぞご随意に。 今日の日曜ですし」

それにしても空気が砂糖漬けになったかのようだ。 さつきから紫苑様は紅いのの傍にくつついて離れない上にやたらと笑顔。 それはまあ、普段は世界の鉄火場めぐりをしていてロクに姿を見せない恋人がこうして側に居るのだから、お気持ちにはわかんなくても……が……。

まったく憎たらしい。 憎たらしいが、なんだかんだで、私も紅いには色々世話になったし、戦士の先達として教えられた事も多い。 恩義を感じるところ大ではあるのだ、今更口にも態度にも出せないし、出す気もないが。

……さて、蕎麦が届くまで掃除をしようか。 しかし周囲を見回してみれば意外な程に綺麗だ。 紫苑様一人ならばうつつすらと埃が積もっていても不思議では無いところなのだが、ひよっとして紅いのが掃除したのだろうか。 とすれば、あ奴は紫苑様一人休ませておく性格ではないから、紫苑様も一緒に掃除なさったのだろうか。

あれの言うことは、割と素直にお聞きになるのだ。 何故だ、やはり惚れた弱みか。

まったく、あいつめ……。

初夏の縁側で将棋盤を挟んで睨み合う、甚平を着た西大陸出の赤毛男と、洋装に身を包んだ応神出身の剣士。これが国際化という奴か。

「王手」

「待て」

「待たん」

……これで私の勝ち星がひとつリードだ。将棋にせよ囲碁にせよ、盤上の戦いならば私に少々の分がある。

およそ末の二つというところか。太陽は中天からだいぶ傾き、塀の外からは子供たちがボール遊びをしていると思しき歓声が響いてきていた。

「……どうした、紅いの？」

盤上を見て神妙な面持ちをしていた紅いのが、ふとこちらを見たのだ。

「いや、なんだ。この間まで俺が居た場所と、ここと。別世界みてえだ、ってな」

南大陸、ナーデル王国。先日までアレスが滞在していた国は、現在国境付近で発見された地下資源を巡って隣国サファイ王国と交戦中だった。

そして、この紅いのはいわゆるバトルジャンキーという奴で、まず大暴れをしてきているはずである。どちらかの陣営に組ずるかそういうのでなく、ただ単に蹂躪して去っていく、はた迷惑な輩だ。基本的に抵抗しない相手の命は取らない主義らしいが、たまに大規模破壊ぶちかますからなあ。

「おぬし、あの戦い方で、そういう事を言うか？」

「上は鉱山にしか興味ねえし、しかも下は徴用された兵だ、悲惨なもんだったよ。戦<sup>や</sup>り甲斐も何もねえ、督戦隊の奴等は潰してやつたがな」

「時代は変わった、とでも言うつもりか？ 似合わんな」

「ほつとけ」

図らずも仕返しができたような、そんなやり取りになったが、私はそんなことで喜べる気分でもなかった。

確かに時代は変わった。機関銃、戦車、航空機 兵器の進歩は留まるところを知らず、比例するように動員される兵の数は増え、犠牲も増えた。それも志願兵でなく、大半は徴兵された人々。

望んで戦場に立ったわけでもない人々ばかりを手にかけるのは、アレスもさすがに堪えたのだろうか。

幸いにして現在の皇国は拡大路線を止めた。魔導王国エル・ネルフエリアは相変わらずの中立主義だ。この二大国はともかく、それ以外の国々は、この東大陸や南大陸の諸国家に対して、食指を伸ばすのをやめない。私らがそこに飛び込んで……一体何ができよう？

「ま、私らは所詮、自分の手が届くところの事にしか手を出せん。戦車潰せるから、飛行機落とせるからって、政治はできんよ」

言いながら、私は盤上の駒を片付けてゆく。駒を桐の箱に仕舞い終えたところで、私は箱と将棋盤を持って立ち上がり、踵を返した。

「……それは」

「前半、昔おぬしが私に言った事だぞ？」

言い残して、私は縁側から去った。こんなこと、顔を見ながら言えるものか。

## その6

紅いのが我が家に逗留しているあいだに、必ずすることが一つある。

「今回も一手願えんか」

「ん？ あー、やんのか。 いいぜ」

このように色よい返事を貰えたので、いま私たちは京の郊外にある、魔導軍の訓練場にやってきている。

私の出で立ちはいえ、昔懐かしい旧式の皇国軍服を改造した戦闘服と、その帯から飾り紐で刀を提げた姿。 紅いのも紅い軽鎧を身につけ、大剣を背負っていた。

「まさか鈍っちゃいねえよな？」

「さあな。 鍛錬は欠かしてないが、勘のほうはどうか」

私はもう戦闘態勢に入っている。 対する紅いのは、大剣の柄の部分に嵌められた紅い宝石、その周囲にあるダイヤルをカチカチと弄っていた。

「これで良し。 やるか？」

作業が終わったのか、顎をしゃくって、大剣を肩にかつぐ紅いのアレス。 私は呼吸を整えて、愛刀の鯉口を切った。 刃渡り四尺ほどもある大振りな刀だが、私にしてみれば最早身体の一部のようなものだ。

すること、つまりは手合わせだ。

さて、目の前の状況に集中せねばなるまい。 私も、アレスも準備は万端。 周辺の結界強度は三度も念押しして確認した。

審判役を買って出た勇氣ある若い少尉には、開始を告げたらさっさと結界外へ逃げるように言明してある。 魔術で強化した脚力なら、この1000米四方の結界からも、まあ余波が及ぶまでに逃げ出せるだろう。

全開だ。それをせずに、勝ちつる相手ではない。

「行くぞ」

「来い」

これ以上の言葉は要らぬ。すうと息を吸い、私は全身へと自身の魔力を行き渡らせた。

「はじめ！」

開始を告げた少尉が、言った通りにすっ飛んで逃げるのを見届け先手は私が！

気で形成した四十八の分身たちに気刃を放たせ、私自身は左右へのステップで自身の残像を残しながら、立て続けに衝撃破を放つ。気刃よりも先にそれらは着弾し、訓練場の地面に次々と穴を穿つてゆく。巻き起こる土煙、その中に、私は音の壁を感じながら、自身を飛び込ませてゆく。

砂煙の向こうへと気刃が消え、直後に爆炎が砂煙を吹き飛ばした。気刃も掻き消されてしまっただろう。しかし予定通り。音速に迫るこの身とこの刃を弾丸として。こちらにめがけ、大剣の刃を向けて突っ込んでくる、アレスにぶつける！

刃鳴り、そしてその勢いに任せるまま距離を離し、制動をかけながら地面を蹴りつつ旋回。再びアレスを正面に捉える。今度放つのは誘導効果を持たせた魔力弾を十二、さらに衝撃破。無論、この程度で紅いのを倒せるとも思っていない。誘導弾より高速の気刃も、先程と同じく分身を作り出して撃つておく。

気刃が炎で掻き消された、そこまでは先程と同じ。その隙を、誘導弾が襲う。紅いのが、爆音と共に動いた。

誘導弾の旋回半径の内側に入るように、亜音速で突っ込んでくるアレス。私は前方に加速術式を多重展開、音速超過に加速し迎え撃つ！

一度目よりも鋭い刃鳴りが響いた。紅いのの大質量の一撃を、私は刃で受け流し、すれ違いざまに刃を握る左手の小指を僅かに振った。

放ったのは収束した衝撃破。最低限、鎧の脇腹に傷はついていないはずだ。皮膚にまで達していれば御の字。

「痛えッ！ 前から思ってたが、最近やる事が姑息だな、お前！」

「格上相手なら小細工を積み重ねて凌駕する！ 誰が言った台詞か覚えてるか！？」

「俺だよ俺！」

口ぶりからして、どうやら皮膚までいったらしい。こちらとて無傷ではないが。 奴の斬撃を二度も受け流すのは腕にくるものがある。

それでも二度も真正面からぶつかつたのは、少しでも有効打を与えておくためだ。一度目の打ち込みはこちらから仕掛け、小指は使わない。そうして二度目は誘導弾を用いてアレスを動かし、こちらへ誘つたのだ。そして斬撃を受け流し、小指で一撃を加えてやる。次はもう使えん策だが、痛みと出血はそれだけで意識を鈍らせ、体力を奪うものだ。

足を止め、再び誘導弾と気刃、衝撃破をばら撒く。露骨な誘いだが……ま、乗っては来んだろうな。しかし、奴より私の方が常に先手を取れるのだから、飽和攻撃で相手に反撃の暇を与えなければいいのだ。手数ならばこちらに圧倒的な分がある。……奴がこのままならば、だが。

衝撃破が着弾し、土煙を撒き散らす。そろそろ三次元機動を混ぜるか。そんなことを考えつつ、慣性を殺しながら旋回する私の脳裏を、さつと冷たいものがよぎった。いかん！

制動術式を多重展開し、さらに推力を逆転させて急制動をかけた直後、私が一秒後に到達していた場所が大爆発を起こし、砂礫がこちらにも飛んできた。紅いのが力任せに撃つた衝撃破か。

「土煙を逆用されたか……！」

土煙による煙幕はこちらの攻撃タイミングを予測しづらくするためのものだったが、それはこちらにとっても、相手の動作が見えづらくなるという意味で同じだった。

とはいえ、布石に用いた気刃を爆炎で吹き飛ばさせる策は、土煙で相手の視界を奪わねば成立しえない。気刃はブーメラン様の軌道を描くがために、読まれやすいのだ。

「さあてと」

……ぬかった！ 制動に注意を払いすぎたか！

動き続け、攻撃を加え続け、隙を与えないという戦術を、自ら放棄してしまうとは、不覚……！

「俺のターンといこうかね？」

背後から声。急に膨れ上がった熱から逃げるように、急ぎ距離をとる。反転するあいだに、自ら生み出した爆炎を断ち割るようにして、アレスは猛追してきた。速力の差はあれど、こちらに動作の無駄が多ければ、それは大した意味を持たないのだ。

疾駆する荒馬のごとき勢いで、赤熱した大剣が迫る。刀で受けるは愚策、それこそ折れてしまうだろう。流す余裕もない。間一髪、二髪の回避を重ね、気がつけば背後は結界の境界。

「チェックだぜ」

それは意趣返しのもりか。

「……生憎と、盤は地上だけではないぞ」

言いながら、私は背後の結界に足をかけ、推力を下方に振り向け、上方に加速術式を多重展開。一息に踏み切って、式を突き破って速度を得、空を翔ける！

宙返りをしながら、下方へと爆撃するように衝撃破をばらまいて牽制し、間合いをとる私。

とはいえ紅いのの義体は飛べんから、空中戦に持ち込むこともできない。よって私は爆撃よろしく上空から攻撃するか、地上にまた降りるしかない。

飛んでいる間も油断はできん。火炎弾や熱衝撃破はひっきりなしに飛んできている。飛翔は姿勢制御に意識をもっていかれて弾幕密度が薄くなるのも難だ。空戦機動はさるトップエース仕込みなんだが。

着地すると、紅いのは対空攻撃をやめた。大剣をこちらに向け  
てはいるが、動かない。そして、唐突にこちらに言葉を投げてき  
た。

「さっきのは徹底してたな。正直アレは勘だったんだぜ」

「私も迂闊だったが、怖いなまったく。気刃はどう防いだ？」

「何度戦ったと思ってんだ、軌道はだいたい読めるんだよ。あと  
は簡単だ」

「なるほど、改良せんとな。……いけると思ったんだがなー」

「対軍、対要塞級の飽和攻撃を俺一人に、だしなあ。地味に酷く  
ね？ ってかさっきのトコがジンジン痛えよ」

「破った奴が言うな。まあなんだ、たまには一方的に勝ってみた  
いだろう」

「ガキの頃の借りを返すつてか。じゃあ負けてやりやあよかった  
な」

「冗談を言うな。そんな事をしてみる、死ぬまで恨むぞ」

「永遠にかよ。これだから女つてやつは」

「……そこは関係あるのか？」

軽口を叩きあいながら、私と紅いのは睨み合う。私は刀を、ア  
レスの方に向けるようにして構えた。

「さ、仕切りなおすか」

「応よ」

ま、結局最後はこうなるのだな、と思いつつ。

衝撃破、気刃、分身、残像、誘導弾、飛翔術式……様々な小細工  
を弄してきたが、結局のところ、私の最大の武器はこの身と、この  
手に担う刀なのだ。それはアレスとて同じであり、ゆえに、私た  
ちの戦いの最後は、大抵、泥臭い肉弾戦となる。むろん、一太刀  
の速度は亜音速なり遷音速、下手をすれば音速超過。互いに「寸  
止め」ができるとの確信があればこそその組み手だ。

もつとも私くらいになると普通にステップするだけで分身めいた残像が出るのだが。

話が逸れた。アレスの武器は、冗談のように巨大な刀身をもつ大剣だ。クリーバーとかいう種別だったか。斬るといふよりはまさに「叩き斬る」、いや、「斬り潰す」とか「叩き潰す」とか、まあもつと過激な表現が相応しい代物だ。故に単発の攻撃は、どうあつても大振りに、大雑把にならざるを得ない。

当然、ただ振り抜くだけならば大きな隙ができる。その隙を、紅いのは「動作を連続させること」によって消している。大振りの一撃の勢いを殺さず、さらに次の一撃へと繋げることで、武器の欠点ともいえる超重量を利点へと昇華させているのだ。

一步踏み込んで刺突、僅かに軸をずらすことでかわされた。直後にアレスは身体を回転させ、薙ぐように振るった剣閃をこちらに叩きつけてくる。それを踏み込んだ勢いのまま地面に身を投じ、転がってかわす。反転した紅いのがこちらに向けて斜め上から振り下ろす追撃を手をついて転がる方向を変えて回避、脚をバネにして跳ね起きる勢いに乗せて片手だけで切っ先を振り上げ、紅いの前髪を一房断ち斬ってやった。ざまあみろ。

そして勢いそのままに宙を舞い、ついでに一回転などして着地。間合いを取ったところから衝撃破を三発打ち込み、それが着弾する前にステップして分身を生み出しながら突撃。この程度の攪乱に惑わされる紅いのではないが、癖だ。

しかしこうすると、こやつはは決まってる。ほら来た。

こちらに向けられた大剣の、柄にあしらわれた真紅の輝石がまばゆく輝く。お得意の全方位爆発だ。こやつは基本的に面倒くさがりだから、面倒な状況、たとえば全方位から攻撃されるとか、同時には対処しづらい攻撃が来ているとか……に陥ったらこれで埒を開けたがる。まあ大抵のものは吹き飛ばせるからな。

それが、私の勝機だ。

閃光、爆音、広がる赫炎、その中に私は切っ先を向けて突っ込ん

でゆく。紅いのが舌打ちした。自分の失策を悟ったか？

体幹を僅かに 音速超過で、動かす。発生した衝撃破が炎を吹き散らし、僅かに紅いのが体勢を崩し、私は身体をその懐に踊り込ませた。

精一杯に意地の悪い顔をして、のど元に刃先をあてがってやる。

「取った」

……おいこらまじまじとこっちを見るな。ちょっと恥ずかしいんだ。

「似合わねー」

「だまれ」

ということで、此度の手合いは私が勝ちを拾えた。

これであと何回勝てば勝ち星が黒字になるんだったか。いかに、忘れた。

まあいい、いつか追いついてやる。それまで、どこか私らの知らんところで勝手に死んでみる。

紫苑様とともに、地獄まで追いかけて行って引つ張り戻してやるからな？

## その7

紫苑様は運動が苦手であらせられる。元々病弱だった、ということもあるが、そもそも大抵の事を魔術でなさってしまつたために、手足をロクに動かさないのだ。そのことを注意すると、

「別段困りはしないからいいのよ」

などとおっしゃることが多い。いつのことだったか、これはいかんと思つて、もっと女性的な部分に作用する言葉を使つてみたことがある。

その日、紫苑様は書斎の椅子に足を組んでどっかと腰掛けたまま、魔術を用いて12ほどの書物や紙片を周囲に浮かせていらつしやつた。これは様々な資料の内容を比較検討をされているらしいが、まあ中身をみたところで私は理解できないものだ。

私は部屋の入口でわざとらしく嘆息し、いかにも呆れているといふような声音と表情を作り、口を開く。

「そのような事ばかりされていると、今に太りますよ」

「……！」

びくり、と表情が硬くなった。効果ありだ。言葉のナイフは

確かに飛び、紫苑様を縫い止めたようだった。

「以前にも申し上げましたが、紫苑様の健康管理もまた私の任のうちと考えております」

「……それって、私が自己管理できないって言われてるみたいじゃない」

このことだが、今になつても自覚はないらしい。時々私が居ないとこの御方はどうなつてしまうのか、と恐ろしくなる事さえあるのだが……。

「腹筋も薄くなつていらつしやいましたし、二の腕、太もも、いずれも更に柔らかく。そろそろ本格的に運動をなさらないと、危な

「いですよ」

「あまり量を食べるお人ではないから、激しく太る、ということはないのが救いといえれば救いだ。酒量も増えているので危ないものだが。」

「腹筋だの二の腕だの太もものだの、何故知ってるかって？ ……まあ、なんだ。色々あるのだ。言わせるな恥ずかしい。」

「私の運動神経なんて無いも同然だって、知ってるでしょ？」  
「難しいことをなさらなくて良いのです。一日10分走るですとか、腹筋や腕立て伏せを回数一桁なさるだけでも、効果はあります」「ふーん……？」

不審げな目でこちらを見てくる紫苑様。

「あれでしたら、一緒に素振りでもなさいますか。私と」

「真剣は多分腕が大変なことになるので、最初は木刀からということにすると、紫苑様は首を縦に振ってくれた。」

「それにしても、以前は弓などもやっていらっしやって、それなりに均整の取れた筋肉をお持ちだったのだが……あれか、やはり魔術のせいだ。紫苑様の魔術に関する才覚は最早人倫を超越したところがあり、いかに複雑な術とて詠唱を必要とせず行使なさってしまう。簡単なものなら、集中すら不要だ。先程の本を浮かべていた術も、物体浮遊術と遠隔操作術をそれぞれの物体にかけて、個数分の同時制御を行っているという凄まじさだ。並の術者ならば脳髓が焼き切れかねない負荷がかかる操作を、涼しい顔をしてこなす。そんなことができるのだから、自分から身体を動かそうという気にあまりならないというのも、ある程度理解はできる。」

「だからといって、主をぶくぶく太らせて良いという理由にはならぬ。私は心を鬼にして、紫苑様の体調管理に邁進せねばならないのだ。」

「いつぞや、先輩と言える執事からいただいた言が思い出されたものだ。」

「雇い主というのは馬か、或いは時計のようなものだ。折にふれ

ての手入れが必要だ、ということさ」

聞いた当時は不敬にも程があると思っただが、事ここに及んでみると、なるほど理解できるものだなあ、と感慨を抱きながら、私は日常業務に復帰したのだった。

翌朝、私は「どうしてこうなった」という思いを禁じえずにいた。目の前には弓道着を身にまとい、汗ばんだ顔を朱鷺色に紅潮させ、目に涙を滲ませる紫苑様が。

私は至極当たり前前の事を言っただけで……。

事の顛末はその十数分前。

私が普段鍛錬する中庭に古い弓道着を身に付けていらっしやった紫苑様は、体重計にでも乗られたのか、どこか鬼気迫るような様子だった。

そんな紫苑様に私はまず木刀を握らせ、次に正眼に構えていただき、それから姿勢を矯正した。べたべたと紫苑様の御体に触るのは若干抵抗があった。うん、あつたんだ。さすがに恐れ多いが役得だという思考も無きにしも非ず……私は何を言っているんだ。

それから素振り開始。私のペースに紫苑様がついてこようとするのは土台無理な話なので、先にその旨を申し上げておいた。ご自身のペースで、ゆっくりと、回数をこなしていつてくださいと。一方で私は全身に”彫り込んだ”術式を駆動した。負荷軽減部へのパスを遮断。あえて過負荷をかけ、身体が耐えられなくなるギリギリの線を見極めて一回一回を振り上げ、そして振り下していった。この全身を焼き焦がすような疼痛と熱感を身体に覚えこませておかねば、いざというときの超過駆動には耐えられん。

百回を数えたところで、動作を一旦停止。隣では紫苑様が十回目を終えたところだった。

「どつというスピードよ……風が吹いてきてちょっと涼しかったわ」

手を止めて、呆れたというふうにおっしゃる紫苑様。

「どういつも何も、負荷軽減なしで身体が耐えられる限界のスピードですが」

何のことはない一言だったが、これが不味く、場の空気が変わった。作務衣を肌張り付かせる程だった汗が、すっと引いてゆく。儂げな有様だが、紫苑様の御姿には有無を言わさぬ迫力があつた。

こんな表情をされる時には、そう、怒っていらっしやるのだ。

それも、私に向けるものでは最大級に。

「この馬鹿。……もうそんな必要ないんだって、何度言ったら、わかるのよ」

不意に一步を踏み込まれ、抱きしめられた。直後に耳元でこぼれ出た御言葉は、震えていて。

その声音はどこか寂しげで、そして静謐な悲しみ、複雑な怒りをたたえているようだった。

「もう終わったの。あなたはもう、戦う事なんて考えなくていいの。全部終わったんだから」

そうおっしゃって下さる紫苑様のお気持ちは、ととても有難いものだ。しかし、私も譲れん。

「……その御下命には、従えませぬ」

抱きすくめるその細腕を振りほどき、足元に跪き、頭を垂れて、そして口を開く。

「あの日、あの瞬間。この世に紫苑様が在られる限り、この身命を賭してお護りすると、誓いました故」

「たわけ。それで、貴女の安息はどこにあると言うの……」  
対して頭上から降ってくる詰問めいた言葉は、しかし、やはり悲しげで。

「とこしえに。貴女様の御傍にあるかぎり」

それでも、私の答えは揺るがなかった。

……私のこの言葉、愚かと言う人があるかもしれん。しかし私は、誰に、どの様に言われようが構わぬ。

これこそが私の、一片たりとも偽らざる、まっさらな本懐なのだ。

私は立ち上がり、紫苑様は一步退き、しばし、無言の刻が流れた。

沈黙を破ったのは、紫苑様。

「……どうでもいいけど、顔が赤いわよ」

「っ、照れているのです！ あんな事を言わせたのはどなたですか、まったく」

「あと何度目よ、さっきの」

「紫苑様があのようなことを問われる限り、何度でも」

「……馬あ鹿」

……あなたも赤面してらっしゃいますよとは、さすがに言えなかつた。

蛇足ではあるが、この日から始まった鍛錬の効果もあってか、紫苑様の身体は適度に引き締まったと付け加えておく。

## その7（後書き）

もともと一人称の習作のつもりで書き始めた近作、まとまりのない乱文でしたが、ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

ここでひと段落、とはしますが、こちらにもネタが浮かび次第何かしら投稿していこうかと思っています。

今後ともよろしくお願いします。

## その8

「あんだ、剣以外に何か趣味ってあったっけ？」

ある日そんなことを、紫苑様に聞かれた。趣味……趣味か。

「紫苑様のお世話が趣味と言えるかもしれませんね」

エプロンに三角巾といういでたちで、片手にはたきを持ちながら、私がそう返すと、

「……何かやってみたい事とかないの？」

などとおっしゃる。確かに、こうして紫苑様の身の回りの世話をするか、あとは鍛錬と後進の稽古が私の日々の生活の全てな気がする。ここらでひとつ趣味を増やして、生活に彩を添えてみるのも悪くはないかもしれぬ。

「そうですね……」

とはいえ、何をしたものか。皇国において広く親しまれている趣味といえば、華道、茶道、楽器、骨董、陶芸、盆栽、収集……思い浮かんだものを列挙してみたが、どれもどうにも、私には似合いそうもないような気がした。武士の嗜みとして和歌や漢詩の知識はあるし、茶道の心得もある。風流や雅、詫び寂びといったものの何たるかも少しは理解しているつもりだが、生来の無骨者として、どうにも気が引ける。

「盆栽とか渋くていいんじゃない？」

よし盆栽は却下だ。自分で想像したが、似合いすぎて逆に癩に障る。

「そうですね……」

ぱたぱたとたきを動かしながら、生返事。ふと脳裏にアレスの顔が浮かんで、「脳筋は脳筋らしく身体でも動かしてよ」とか言って消えていった。茹で上がった甲殻類のような色合いの分際……しかし私の脳裏に浮かんだものってことは、私の深層心理の反映ということなのか？ いかん、急に気分がげんなりしてきた。

だいたいその言に一理も二理もあるから余計に腹が立つ。茶道も華道もどうにも窮屈だし、審美眼や鑑定眼に自身があるわけでもない。そのあたりは紫苑様の領分だ。手先の器用さには多少の自信はあるが……。いや、こういう文化系の趣味でなくても別にいいんじゃないか？ 脳内アレスの言に従うようで微妙に嫌だが。「スポーツとかどうなの？」

コーヒーをすすって、紫苑様もそうおっしゃった。うんよしそれ採用。

「……いいかもしれませんね」

そういうことになった。

\*\*\*\*\*

紫苑様曰く、エクストリーム・スポーツというものがあるらしい。エル・ネルフェア発祥の、魔術師のための様々な競技群とのことだ。競技ごとに定められたルールに従いさえすれば、魔術を使用しても良いのだとか。あちらでは相当に長い伝統を誇る競技群らしいが、応神では魔術でそういうことをするという発想がそもそもなかったようだ。

聞けば、なんでも魔導軍の中に、「エクストリーム・サッカー」とやらの同好会があるらしい。皇国魔導軍は盟友たるエル・ネルフェア七耀騎士団および飛天騎士団との交流も盛んなので、あちらから直接伝わってきたのだろう。原型はアルビオンなどの西大陸諸国で大流行している球技だ。

そんなわけで、私はいま京の郊外にある魔導軍の訓練場。先日私と紅いのがやりあったとこだ。に来て。さて、そこには今回白線で四角く区切られたフィールドに、ネットを張った鋼管の構造物、ようはゴールがふたつ置いてある。一般的なフットボー

ルもしくはサッカーの競技場のはずなんだが……。

繰り返し広げられていいる光景は常軌を逸していた。何か光ったり爆発したり燃えたりしとる。これ本当に蹴球サッカーか？

「うおおおーッ！ 九頭竜一閃ッ！！！」

なにやら叫んでいるのは弓削殿だ。九頭竜っぽいオーラを出しながらボールを蹴ったかと思うとボールが九個に増えた。どういう理屈だ。

「とめる！」

奈々のやたら鋭い気合と共に、九つあったボールがひとつに戻り、それは彼女の手のグローブの中に綺麗に吸い込まれていった。おぬしそんな性格だったか？

ゴールキックから前線の本多忠紀殿がボールを受け取る。良い感じにゴール前、迫る敵DFを……かわさないのか！？ 強引に

シュートを決めに行くつもりか！ っておい、それ、蜻蛉切とんぼきりか！？

「結べ蜻蛉切！ 七星旋墜ーッ！！！」

ええい、さっきの弓削殿といい、なんなんだそのセンスは！

あ、DFが吹っ飛ばされた キーパーも吹っ飛んで、ネットが破れたってどうか槍でボール突くのはアリなのか、それで壊れないボールはなんなんだ、ああもう突っ込みどころが多すぎやせんかコレ。しかし大体理解はできた。なるほど、これは私向き……かもしれん。

\*\*\*\*\*

要はあのボールを使っているからサッカーということらしい。

試合が終わった後、弓削殿がドヤ顔で説明してくれた。一発頭を叩いてやったが私に罪はないと思う。

その後私も参戦したいということと話したら、私がどちらのチー

ムに加入するかで少しモメた。 加減はしてやるぞ？

「では劍聖殿、私のほうへ」

本多殿が手招きしてくる。 その”劍聖”はやめると言ってる  
だろうに……。

「お手柔らかに頼みますよ」

と、弓削殿。 安心しろ、死ぬことはない。

「輝夜様がいらっしやるなら、私は楽できそうですね」  
奈々、弛むなよ？

「よし、いこうか」

そしてキックオフの瞬間、私は風になった。

以下はダイジェストでお送りする。

「抜かせませんよ！」

「阻止するッ！」

「良い度胸だ、ついてこれるか試してやるっ！」

「で、でたー！ 輝夜様の24分身フェイントだー！」

「最大出力で行くぞ！ 避けるよ！ 当たるなよ！ 死ぬぞ！」

「うわあ音速超過シュートだー！ 避けるー！」

「身体のどこかに当たってくれー！！！」

「かもくん ふつとばされたー！」

「ここを抜ければ！」

「させん！」

「三分身衝撃破から突っ込んだー！？」

「……あのう、すみません輝夜様、もうちょっと加減できません  
か」

試合は私が入ったほうが20対0で圧勝した。

私は出禁になった。

……盆栽でもはじめようかな。

その8(後書き)

9/5 誤字訂正

## その9

技術の進歩というものは目覚ましいもので、この都でも私が若い頃にはなかつたようなものが多く見られるようになった。 霊子通信<sup>キテル</sup>の原理を応用した映像受信機<sup>テレシジョン</sup>やら、完全術式機関駆動の個人用自動車やら。 エル・ネルフェリアなどではとうに普及しきっていたものが応神ではやっと普及し始めた、といったところだ。

洗濯機や掃除機といった魔導機<sup>まどうき</sup>は確かに便利で、私としても重宝している。 西大陸製のものとは違って、送電線を通して送られてくる電気ではなく使用者の魔力で動いているので、発電所や送電網といった巨大な設備が要らないというのもいい。 予算が浮いて浮いて、羨ましいですなとシユティアから来た外交官が言っていたのを思い出す。

エル・ネルフェリアで最も特色ある工業製品でかつ便利なものといえば真つ先に自動人形が思い出されるが、値段と文化の面で受け入れられにくい面があるようだ。 私も初見では随分と動揺したものだ。

道を歩いていて、街頭テレビを見かける頻度もずいぶん増えた。

大抵はスポーツの試合の中継を流していたり、或いは魔導院<sup>まどういん</sup>の天文部が発表する天気予報などを流していたりする。 人気がある競技の時などは、歩くのに邪魔に思えるほどの人だかりができることもある。 だいたい試合のある日は決まっているので、そういうときは街頭テレビがある道を避けるなどするのが上策だ。

その日も私は市場に買い物に出かけ、夕食の材料を仕入れて帰るところだった。 選択した経路には街頭テレビを置いている魔導機屋があつて、エクストリーム・フットボールや野球、レスリングの試合などがある日は人だかりができる道だが、その日はそのような事はないはずだった。

ところが私の目の前には、それらの人気スポーツの試合中継があ

る時に勝るとも劣らぬ量の人ばかりがあった。これは一体どうしたことだろうか。考えたところで原因がわかるわけでもなく、テレビに見入っている時間もない。というわけで、私は人ごみをすりするりと抜け　しかし買物カゴが時々持っていかれそうになるのに辟易へきえきしつつ、その街頭テレビの前を通り過ぎようとした。通り過ぎようとして

「……はい、皆さんごきげんよう。　御神楽紫苑みかくらしおんよ」

「ぶはっ」

聞こえてきた声に盛大に吹いた。

\*\*\*\*\*

し、紫苑様！？　確か今日は魔導軍の演習の監督をされてらっしゃったはずだが、何故その、ご出演していらっしやいますか。

よく見たらレポーターの顔が引きつってるじゃないか。　横で頭抱えてるのは魔導軍の報道官の某准将じゆんしょうか。　きっと特別ゲスト出演どころか、面白そうだから乱入したに違いない。

すっ飛んで引つつかんで退場させ遊ばして説教するかと思っただが、しかしこんなところで音速超過しては、白菜としいたけと豚肉ともやしと鱈たらの切り身と水菜が入った買物カゴが死ぬ。

今夜の鍋の具材をこんなことで散らすわけにはいかん。

「そ、それで本日は魔導軍が大規模な演習をおこなっているのとこのですが」

「ええ、皇国の国土こくどくと国民たる皆さんを護るための大切な訓練です。皆さんのご理解とご協力には感謝しているわ」

さすがに對外モードらしい。　キリッと引き締まった御顔は一言で表すならば美しい。

「では、一体どのような訓練を行っているのか、案内させていただきます」

きましよう」

報道官がその一言にあからさまに慌てた。多分予定になかったのだろう。まさか見せられないような事をしている……ということも、いや、紫苑様が演習監督をすると地獄になるって奈々が言っていたしなあ。

「魔術師個々人は皇国魔導軍において最も優れ、かつ最も強力な戦闘単位と言えるでしょう。戦車級の砲撃能力と防御能力と機動性、さらに人間ならではの柔軟性を併せもつもの、それが魔導軍における魔術師です」

おお、マトモな事を言ってる。昔は命中率も連射性能も低いマスキットの代わりに火球や氷槍のひとつでも撃てればよかったが、今となつては魔術師はワンマンアーミーであることが求められる。要するに一人で敵陣に突っ込んで好き勝手に暴れて帰ってこられることが要求されるのだ。無茶な、と思う向きがあるかもしれないが、まあできる奴は居るんだからしょうがない。対応出来ない方が悪い。

カメラがパンし、演習場の光景を映した……が、何をやってるんだあ。なんか爆発して一人古典的な焦げ方をしたぞ？ あ、運ばれてく。

「あらー、成政なりまさくんドボンね。それじゃ次行くわよお」  
それを見て紫苑様が演習場内に何かを放り投げた。魔術で創つた……ボール？

それを全力疾走で受け取つたのは賀茂かも殿つぽいが、必死な顔して後方にいた別の誰かに投げ渡した。同時にだだっ広い演習場内に散っていた百余人が一斉に動き出した。おい速いな、二百は出てるかもしれんなあ……。

そうして動き回る魔術師たちの間を、光り輝くボールのようなものが飛び交う。徐々に輝きの度合いを強めていく球体を見て、私は猛烈に嫌な予感がした。演習場から響いてくる男女の怒号と悲鳴とヤケクソ気味の声のおよそ百重奏がそれを後押しすることこの

上ない。

「……あれは、何をしているのですか？」

若いレポーターは若干引いている。当然と言うべきか修行が足りないというべきか。二つの意識がせめぎあう自分に疑問を感じなくもない。

「あれは私特製の……まあ、平たく言えば、爆弾ね」  
なんだと。

「五分の時間経過」、同じ人が三十秒以上手に持つこと”、”  
地面に落ちること”によって炸裂するように設定してあります。

で、巻き込まれた人は黒焦げでアフロになるの。大丈夫、私が余力全部使ってボケ術式を演習場全体に張ってるから死人は出ないわ」

えげつなかった。「えげつなく」「ろくでもなく」「いやらしい」の頭文字を取って「エロい」という事もあるそうだが、紫苑様は間違いなくエロいお人だ。どういう意味でかって？ 想像のとおりで。

「それから、地面に落とすことで爆発したら演習場全体に効果が及んで、漏れなく全員アフロ」

鬼か。

つまりそんな爆弾を可能な限り自分のところで爆発させないように、彼らは逃げ回りつつそれをパスし合っているというわけだろう。誰だつてそんなもんが自分のところで爆発するのは嫌だから、必死になるというわけだ。

やんややんやと観衆はそれを見守っている。何とすべきかなあ、この光景。

……あ、新人っぽいのが受け取った瞬間に全員示し合わせたかのように遠巻きになりよった。受け取った側は必死に駆け回ってるが皆隙がないな。そんなことで団結示さんでもよかるうに あ、新人殿がアップになったが泣き笑いじゃないか。ああ思い出したこの新人つい最近新しく彼女が出来たとか吹聴ふきちやうしてたなあ。しか

も巨乳の。くそ。

「てめえさっさと爆発しろ！」

という声が演習場から聞こえてくるかのようだ。私も同意した

い、爆発しろ。

「畜生<sup>ちくじょう</sup>それでも人間ですかこの外道ども！　こうなったら全員道連れにして僕も死んでやりますよ！？」

「させるかア！」

「アッー！」

彼がヤケを起こして爆弾を地面に叩きつけようとした瞬間、本多<sup>ほんた</sup>殿が彼の後ろから蜻蛉<sup>とんぼきり</sup>切に乗って突っ込んできて穂先<sup>ほさき</sup>が尻に刺さった……のか？　滂沱<sup>ほうた</sup>しながら地面に沈んでゆく新人はやり遂げた顔をしていた。カメラに向けて親指すら立てている。意外と余裕あるなこいつ……。

そして本多殿が宙にこぼれた爆弾をキャッチし　あ、爆発した。その瞬間、街頭テレビの周囲がどつと沸いた。大丈夫かこの国

……私がすっかりせねばな、うん。常識人代表として、な。

そんな決意を新たにして、私はいそいそと帰途に戻ることにしたのだった。

## その9（後書き）

試験的にルビを増量。

どういう基準で振ればいいのか思案中、良い案などあれば感想にポストください。

……べ、別に感想欲しいからってこんな事言ってるわけじゃないんだからね！

9 / 2 2 一部表現修正、ルビ追加

最近この皇国がどんどん変な方向に進化していつている気がする  
ならない。 文明開化ってこういう方向性とは少し違うと思うんだ  
が……。

いや、その範となるのが”あのエル・ネルフェリア”なのだから  
しょうがないのか？ 私が世話になった士官学校ですら相当にテン  
ションがおかしかったからなあ。 軍人っていうのは、法律家と  
並んでその国で一番堅い職業の部類に入ると思うのだが それが  
どうだ、わが国の最精鋭たる魔導軍ですら「あのありさま」だ。

娯楽方面もアレだ。 先日最終回を迎えた大河活劇「超時空天下  
人ヒデオシ」は、何故だか現代から転生して時空跳躍能力を授かっ  
た猿顔の主人公が、タイムパラドクス起こしまくりで自分の都合が  
いい様に歴史改変をしまくって、最後は何故か歌の力で天下統一を  
果たしたはいいものの、最後には歴史改変の無理が祟たたって猿の時代  
まですっ飛ばされ、そこで猿社会にやたら馴染なじんだ拳句「ワシの戦  
いはこれからだぎゃあ！」で打ち切りエンド気味だった。 続編製  
作は検討中らしい。

また、子供たちの間では日曜朝にやっている「戦国魔法少女おイ  
チ」なるアニメが人気を博している。 この間の回では恋人のナガ  
マサを人間不信気味の兄の魔手から救ったというところから始まり、  
超空間要塞イチジョダニに乗り込んでナガマサを兄に対する裏切り  
に追い込んだ怪人アサ・クーラをなます切りにし、その怪人をさら  
に影から操っていた黒幕の魔人ソーテキの首を必殺技「リリカル介  
錯」ですっ飛ばし、そのしゃれこうべで盃むかすきを作ってナガマサと一緒  
に酒を飲んで周囲がドン引くという場面で次回へのヒキとなってい  
た。 あれ教育に悪いにも程があると思うんだがどうなんだ。 ち  
なみにナガマサの父は怪人アサ・クーラに操られ、数話前に爆散し

ている。ただの精神操作という操られ方からして爆死させる必要はなかったと思うのだが、恐らくナガマサとおイチの交際に反対していたためだろう。つまりは謀殺だ。……いいのか本当に？

ちなみに私は毎週見ている。なぜかと言うと、主人公おイチの仲間の一人、西国無双ギンチヨが黒髪ポニーテールで妙に私に似ているからだ。モデルにされてるんじゃないかと思うのは自意識過剰だろうかと思うが、気分はいい。

ちなみにおイチは割と重度のヤンデレである。矛先は恋人のナガマサばかりか兄にも向いており、そういう意味でも教育に悪い。

ギンチヨはレス、もう一人の仲間のイナヒメはDS。……ホントに大丈夫か子供たち。男子向けの「退魔戦隊オンミョウジー」もレッド役の安倍晴明あへのせいめいを筆頭にやたらとバックステップだったり連続飛び蹴りで移動したりと、まともに前に歩けない変態だらけで大概がいだし、小学校での会話をあまり想像したくない。ドウエごっことかやってたりするのだろうか。悪夢だ。

……なんてことを曰がな思うわけだが、ある日驚愕の事実が判明した。

\*\*\*\*\*

「輝夜、ちよつと珈琲が怖いんだけど」

「落語ですか」

私は自室で端末を操作している紫苑様に珈琲を淹れるよう命ぜられ、その通りにしていた。薬缶に水を入れ、調理器の上に置いてツマミを「強火」のところまで捻りながら魔力を通す。薬缶の下の術式回路に魔力が通い、赤熱したのを確認してから、私は紫苑様の部屋に戻った。湯が湧くまでヒマなので、その仕事を観察してみようと思ったのだ。

そのとき、紫苑様は何か書き物をされていらっしやるようだった。書くといつても紙媒体ではなく、エル・ネルフェリア製の板状タブレット術式端末に、だ。霊子通信網キナル・ウェブの技術はまだ輸出解禁がされていないので、書き込んだ結果は記憶装置ごと持ち運ばなければならぬが、手のひら大の薄く軽い物なので、重い紙束よりは良いと文筆業や事務方に好評を得ているらしい。欠点としては相手方も同じものを持っていないという意味が無いというところか。

見た感じ、学術書やエッセイの類では無さそうだった。内容は字があまりお綺麗でない（婉曲表現）上に小さいのでよくわからない。

「何を書かれていますのですか？」  
背後に立ち、そう問うてみる。

「つて、輝夜!？」

一瞬で偽装術式を展開され、画面が灰色一色になる。これはなんだ、つまり、私に見られたくないようなものを書いていたってことか。

「もう、気配消して後ろに立つのやめなさいよ!」

と言うかこちらに向けて怒鳴るお顔が真っ赤で非常に可愛らしくて上手く言葉にできない。

この方にもこんな恥じらいというものがあったのか、と今更新鮮な気分だ。いや、昔はもっとこう、色々あった気もするが、その頃には私も未熟で、こうして萌えるだけの余裕もなかったのだ。

……ん?

待て、今私、ごく自然に「萌える」とか使ったぞ……?」

「いやそこでほっこりした拳句に勝手に沈まないでよ。私が反応に困るわ」

「は、申し訳ありません。少々テンションが乱高下しまして」

「貴女そういうキャラだったっけ……」

頭上から呆れ気味の紫苑様の声。　いかん、若干引かれている。

立ち上がり、膝についた埃を払って私は紫苑様の後方に控えた。果たして今私はどんな顔をしているだろうか。湯はまだ沸かない。

「ああ、豆の種類と挽き加減はどうなさいますか」

「強引に誤魔化すな。……ま、いいわ、3番のブレンドで粗挽き気味にお願い」

「承知いたしました」

上手いこと場を離れる口実ができた。あそこから知らぬ顔で話を続けられるほど私の神経は凶太くない。うーん、私も毒されてきているのだろうか……。いや、だとしたらもうだいぶ前、エル・ネルフェリアにいた頃に原因が……。思い当たる節がありすぎて嫌だなあ。

……薬缶の笛が鳴り出したので、とりあえず命ぜられた事をこなして気をまぎらす事にしたのだった。

\*\*\*\*\*

昨日は何やらうやむやになってしまったので、紫苑様が出かけられた際に御部屋に侵入を試みることにする。一体何を書かれていたのがどうしても気になるのだ。一瞬見えたものは、戯曲か何かの形式に見えたのだが。

部屋に勝手に入るなどか突っ込まれそうだが、机の上のものに触らないことを条件に床の掃除をする許可は得ているのだ。という事で掃除機の口先と首根ハンドルっこを掴みつつ紫苑様の部屋に入る。

どうでもいいがこの掃除機、名前は「超吸引サイクロン君」と言う。擬似人格搭載で吸わせるもの次第で機嫌が良くなったり悪くなったりする小粋なヤツだ。アレした後のちり紙などを誤って吸わせてしまったら凄く喜ばれて叩き壊してやるうと思っただが、こう

いうエル・ネルフェリア製魔導機は輸入関税などもあつて高いから踏みとどまった。あと一寸で逝くところだったからまったく間髪であつた。このエロ掃除機め……。

”おそうじ?”

持ち手部分の操作画面が明滅し、文字を映し出した。

「紫苑様の部屋のな」

”かみ? かみ?”

「良質なパルプが大量に転がっているはずだ。ちよつとインクの匂いがするだろうが」

こつこつ会話もできるが、ご近所に聞かれると不審人物扱いされる可能性があるので注意を要する。喋る掃除機なんてもの、皇国の技術じゃ作れんからな。

……さらにどうでもいいがコイツ男性人格なんだよな。基本幼い風だがこの状況は凄いが褒美なんじゃないか。あれ捨てるか売りに出したほうがいい気がしてきたぞ?

”おそうじ、しないの?”

「ああすまん、考え事をな」

第二の目的も忘れてはいけない。手元のスイッチを入れながら部屋に入り、床に掃除機をかけながら机の上を探してゆく。

あまりガサゴソやると弄ったことがバレるので、とりあえずは眺める程度。あっさり見つかった。無造作に積まれた本の山の上に、タブレットがこれまた無造作に置かれている。手にとってみるとやはり軽い。

黒一色の画面を触ると、微かな振動と共に画面に光がともった。

内部に魔力が巡っているのを感じる。すぐに操作可能な画面に切り替わったあたり、ロックの類はかかっていないようだ。好都合だが、無用心というか何というか……。

「機密は私の頭の中だけだからいいのよ」

などと以前おっしゃってて、その時は「はいはい凄いですね」と流したのだがひょつとしてマジか。だとしたら……いや、驚いて

みせても白々しかつただろうな。

それにしても、タブレットの中身もえらい散らかりようだ。一体どこに何が入っているものかさっぱりわからん。とりあえず適当に格納フォルダを開いては閉じ、開いては閉じ 更新日時が昨日のデータを発見。

”なに してるの？”

「知的好奇心を満たしてるのだ」  
”だいじ”

掃除機に応答を返しつつ、読み込みを待つ。 1 ページ目、表示された表題は なに？

『おいち 26話』

……どういうことだ。 その下には『敵は本能寺周囲にあり』とサブタイトルらしきものが。

まさか、まさかのまさかだが、もしやこれは、『戦国魔法少女おいち』の……？ いや、まさかではない。 これは確信を持てるレベルだ。 『おいち』の放送はまだ十五話。 十以上も先の話の内容がここにあるということは。

『脚本：苑田紫乃』って紫苑様か！？

つまり、その、アレだ。 どことなく私に似てるような気がしたギンチヨって

「かあぐつやあ」

「私がモデルなのですかッ!？」

振り向いて肩を掴んでかくかくと揺する。 見てる分にはよかったがいざ本当に自分がモデルとなると言いたいことは山ほど出てくるのだ。 レズとか否定する気はないがあんなにベタベタしてたか私?! っていつか私は両方いけるんだ、誤解しないでいただきたい。

「紫苑様! どうなのですか!」

「……その前にアンタが私に弁解すべきでしょうがこの状況はッ！」

あ、天地が引っくり返って

……そしてOSHIOKIが始まった。

## その10（後書き）

10回で許してもらえたそうです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8958v/>

---

従者の日常

2011年9月27日01時16分発行